

圧が四国の南を通る場合 ii) 低気圧が日本海に進む場合の2つをとりあげ、更に昨年の資料から iii) 弱い台風が南から接近し、四国の南に停滞する前線を刺激して大雨を降らせる場合を取り上げ、それぞれについてエコーパターンの特徴、セルの動き等を調査した結果を述べる。セルの動きは700mbの風と相関が高く、エコーパターンについては例えば ii) の場合低気圧が九州の西に接近すると四国地方にエコーがあらわれ、寒冷前線が通過するまで存在する。それ故前線とレーダーエコーの位置は観測時刻により異なる。

10. 今門宗夫 (種子島測候所): 東支那海の低緯度低気圧 (台湾坊主) のレーダーエコーの特性について (15分) (ビラ)

昭和34年から昭和39年までの間に、種子島測候所レーダーで観測した台湾坊主40例について、エコーパターンの分類を行い、発達衰弱の過程における特異なエコーを検出しようとした。また、低緯度から北上してくる台湾坊主の特性として、熱帯低気圧の要素としてのスパイラルバンドやうず状エコーの有無等についても調べてみた。

11. 塩田輝也 (室戸岬): レーダーの台風予報への利用 (台6309の大雨) (15分) (スライド使用)

台6309による四国地方の大雨は、顕著なレインバンドが四国地方に長時間停滞していたことが原因している。

陸上のエコーと雨量との対応は、時間雨量5mm以上で良好である。海上のレインバンドの陸地に侵入する地域では、時間雨量10~60mmに達し、それ以外では20mm以下である。すなわち降水総量では地形性降雨として扱われても、短時間内の降雨分布はレインバンドに著しく対応する。このレインバンドの動きは、台風中心

に対し見かけ上外方に拡がることが知られている。この台風の場合、四国南方洋上の降雨セルの動きはバンドに平行して移動している。すなわち、台風の移動とバンドの外方への拡がり相殺されて、南方洋上から四国地方にのびるレインバンドが移動しなかったことが特徴である。

12. 藤戸 誠・長野 勲 (種子島測候所): 台風圏の風速とエコーの運動との関係 (20分) (ビラ)

本年、種子島付近を通過した台風について、エコーと風速との関係を調査した。まず、エコーとダインス記録に現われた突風との関係をみると、突風とエコー通過が一致しており、またエコーと発散収束の場の一致がみられる。さらに台風圏内のエコーを弱風帯、中間帯、強風帯に分類し、それぞれの特徴についても調べた。

13. 井田秀治 (名瀬測候所): 台風のレインバンドの運動 (15分) (16mm 映写機使用)

台風のレーダー観測でもっとも困ることは、眼がはっきりしない台風の中心を決めることである。この中心はレインバンドの曲率から推定しているが、レインバンドの運動の一般的な性質を調べておくとも一層精度のよい中心が推定できる。

ここでは眼がはっきりした台風を選び、その眼の中心に相対的なレインバンドの運動を調べた。方法は5分間隔で引伸した写真を16ミリシネで複写して動画を作製した。その結果を示す。

14. 今井一郎・渡辺和夫 (気研台風): レーダーおよびタイロスで観測された台風のレインバンドについて (15分)

台風6309号のレインバンドがタイロス7号で観測されているので、レーダー解析の結果と合わせて論ずる。

地上気象観測法などの一部改正について

気象庁では地上気象観測法、航空気象観測指針、観測所観測指針のうち、「巻雲」を「絹雲」(けんうん)に、「巻積雲」を「絹積雲」(けんせきうん)に、「巻層雲」を「絹層雲」(けんそううん)にそれぞれ改正し、昭和40年1月1日から実施することになった。(昭和39年12

月16日気測発第50号)。これに関連して国際気象通報式、航空路実況気象通報式等のうちの同様の名称の改正も同時に行われる。

改正の理由については天気1964年10月号336頁を参照されたい。